

釧路市教育委員会 令和7年第10回4月定例会会議録

- 1 日時：令和7年4月16日（水）13時30分から15時00分まで
- 2 会場：釧路フィッシャーマンズワーフMOO 2階 教育委員会室
- 3 出席者  
岡部義孝教育長  
(教育委員)  
山口隆委員、小出美貴子委員、榎山彩子委員、大山稔彦委員  
(事務局)  
澤口学校教育部長、工藤生涯学習部長、本川教育指導参事、司口学校教育部次長、臺野施設計画主幹、小西学校教育課長、三浦教育政策主幹、渡部給食担当主幹、大島学校指導課長、齊藤総括指導主事、鈴木北陽高等学校長、及川北陽高等学校事務長、曾根美術館長、秋葉博物館長、内海生涯学習課長、竹内スポーツ課長、平野ふれあい主幹、長谷地音別教育事務所長、小松阿寒教育事務所総括係長
- 4 議事録署名人 小出委員 榎山委員
- 5 傍聴人数 0人
- 6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- (1) 令和7年度小中学校児童生徒数等の状況について
- (2) 令和7年度北陽高等学校入学生等の状況について
- (3) 令和7年度釧路市奨学生の決定について
- (4) 令和7年度学校教育指導について
- (5) 算数・数学に関するアンケートの結果について
- (6) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について
- (7) 北陽高等学校への景文高級中学訪問団の来校について
- (8) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について
- (9) 令和7年度市立美術館事業について
- (10) 動物園の近況について

## 7 会議内容

### 【公開案件】報告事項

#### (1) 令和7年度小中学校児童生徒数等の状況について

(小西学校教育課長)

報告事項1、令和7年度小中学校児童生徒数等の状況について報告する。

今年度の新入学児童生徒の状況については、小学校1年生は前年の795名より102名多い897名である。また、中学校1年生は、前年の1,084名より95名少ない989名となっている。このほか、附属釧路義務教育学校前期課程の1年生は39名、後期課程の1年生(7年生)は83名となっている。

次に、市立小中学校全体の児童生徒数の動向については、全ての学年において減少している。小学生の合計人数は、前年度の5,748名より190名減の5,558名、中学生の合計人数は、前年度の3,297名より122名減の3,175名となっている。特別支援学級在籍児童生徒については、小学校では前年より33名増の640名、中学校では前年より11名多い269名となっている。なお、今回の集計は4月1日現在のものであり、今後、学校基本調査等で使用される、5月1日を基準とした報告値においては、若干の増減が生じることが見込まれる。参考として、市立小中学校における児童生徒数の10年間の推移をまとめた表を配布しているのでご覧いただきたい。児童生徒数の合計の比較については、小学校が平成28年度で7,734人であったものが、令和7年度で5,558人となり、2,176人の減で、約28%減少している。また、中学校が平成28年度で4,073人であったものが、令和7年度で3,175人となり、898人の減で、約22%減少している。学校の規模感でいうと、普通学級での単純比較では現在小学校1学級35人、中学校1学級40人で編成されており、その基準をもとに換算すると、この10年間で普通学級は小学校で約71学級、中学校は約26学級減少していることになる。また児童生徒数が全体的に減少する中で、特別支援学級に在籍する生徒の割合が増えている傾向にある。

◎この説明について、各委員から次の通り発言あり

(岡部教育長)

今年の小学校1年生が増加している要因を認識しているのか。

(小西学校教育課長)

係内でも検討したが、要因はわからなかった。

### 【公開案件】報告事項

#### (2) 令和7年度北陽高等学校入学生等の状況について

(鈴木北陽高等学校長)

報告事項 2、令和 7 年度北陽高等学校の入学生等の状況について報告する。

令和 7 年度の新入学生数は、定員の 200 名となっており、そのうち 60 名が推薦の合格者となっている。また、新入学生を含めた在校生数総数は 593 名となっている。

続いて令和 6 年度卒業生の進路状況である。進学については、希望者数 146 名に対し 142 名が決定し、決定率は 97.3%、校種別の内訳は記載のとおりである。就職については、希望者数 46 名に対し 43 名が決定し、決定率は 93.5%、業種別及び地域別の内訳は記載のとおりとなっている。

補足的に説明すると、進学のうち国公立大学の合格者数 20 名は、一般入試で合格したのは 1 名、あとは総合選抜型、推薦の入学となっている。地元への進学は 20 名中 15 名が釧路教育委大学、釧路公立大学への合格となっている。短大についても 11 名中 7 名が釧路管内となっている。看護学校についても地元が多く、17 名のうち釧路市内の 3 つの学校に合計 16 名が進学している状況である。

もう 1 点は海外への進学が出始め、提携したオースティン・ピー州立大学への留学が 2 名の予定で準備が進んでいる。それ以外に 2 名ほど短期留学を含めた海外への進学意向や希望が出始めている状況になっている。

◎この報告について、各委員からの発言はなし

#### 【公開案件】報告事項

##### (3) 令和 7 年度釧路市奨学生の決定について

(小西学校教育課長)

報告事項 3、令和 7 年度釧路市奨学生の決定について報告する。

釧路市奨学金貸与制度は昭和 29 年に始まり、令和 6 年度までに延べ 3,356 名に奨学金を貸与している。

最初に、令和 7 年度奨学生の当初の募集人数および応募人数について説明する。なお、貸付の財源の違いから、釧路・音別地区と阿寒地区の 2 つの地区に分けて報告する。

高等学校募集人数については、当初の募集人数である釧路・音別地区 5 名、阿寒地区 4 名、合計 9 名に対し、釧路・音別地区で 2 名の応募があった。阿寒地区は応募がなかった。

次に、高等専門学校区分については、当初の募集人数である釧路・音別地区 2 名、阿寒地区 2 名に対し、いずれも応募はなかった。

大学・専修学校（短大・大学院を含む）については、当初の募集人数である釧路・音別地区 35 名、阿寒地区 6 名、合計 41 名に対し、釧路・音別地区で 41 名、阿寒地区で 1 名、計 42 名の応募があった。

次に、選考についてだが、去る 3 月 25 日に開催された釧路市奨学審議会において、家計の状況・身体・学業・人物等から総合的な審議を行い、奨学生を選考した。

選考については、より多くの応募者へ貸与できるよう、審議会の上で、応募人数が募集人数に満たない区分の採用枠を、予算の範囲内で別の区分に振り替える調整を行った。そのため、釧路・音別地区において、高等学校区分の3名分、高等専門学校区分の2名分の予算を、大学・専修学校区分に振り替えた。その結果、調整後の釧路・音別地区の大学・専修学校区分の採用枠は、当初の35名から2名増えて37名となった。

続いて、審議会での選考の状況を報告する。学業基準について、釧路・音別地区において、3年間の評定平均が3.0以上という選考基準に満たない方が3名いたため、対象から外し、審議となった。人物・身体において選考基準に満たない方はいなかった。以上奨学審議会における審議および答申に基づく採用決定者は、釧路・音別地区で高等学校2名、専修学校・大学37名、阿寒地区で大学・専修学校1名となった。全体としては、応募者44名のうち、40名が決定となったところである。

◎この報告について、各委員からの発言はなし

#### 【公開案件】報告事項

##### (4) 令和7年度学校教育指導について

(齊藤総括指導主事)

報告事項4、令和7年度学校教育指導について報告する。

学校教育指導は、私たち指導主事の本来業務として位置付けられており、市立学校を訪問し、教育課程や学習指導、生徒指導、その他の学校教育に関する専門的事項について指導・助言を行う大切な機会である。今年度も、昨年同様、北海道教育委員会が行う学校教育指導の実施要項のとおり、年に2回以上の学校訪問を行う予定である。特に今年度の計画訪問1回目については、重点として次の5点を確認してまいりたい。1点目は「学校いじめ防止基本方針」の確認である。釧路市いじめ防止基本方針の改訂を受けて、各学校における具体的な取組や組織の改善を図られているかを確認し、未実施の学校については厳しく指導してまいりたいと考えている。あわせて、子どもたちを含む保護者に対して、学校いじめ防止基本方針をしっかりと伝えているかを確認し、周知の徹底を図るように指導してまいりたい。2点目は小中ジョイントプロジェクトの着実な推進である。令和7年度の教育行政方針でも示しているように、学力向上に伴う授業改善、ふるさとキャリア教育の推進など、多くの重要な施策の要となるのが、本プロジェクトである。中学校の校長先生の強いリーダーシップのもと、様々な取組に着手しているか、具体的な動きが見えているかについて確認してまいりたい。3点目は研修体制の充実である。授業改善を強く進めていくためには、それぞれのライフステージに応じた資質向上が強く求められている。各学校で教員が主体的に学び、意欲的に取り組める校内研修の体制を構築しているかどうかを確認してまいりたい。4点目は組織的な不登校対応である。令和8年度には学びの多様化学校が開校されることにより、釧路市の不登校対応が一体的に充実していく。その中で重要なことは、学校における不登校の

子どもたちへの対応である。不登校対応コーディネーターを中心に、子どもたちに対するアセスメントに基づいた適切な対応状況や学びの場の環境の調整について組織的に行われているかを確認してまいりたい。5点目は特別支援教育の状況についてである。近年、発達特性による環境不適應を起こす子どもたちが増加していることに伴い、特別支援教育の充実、とりわけ各学校の自立活動の授業の質を高めることが急務となっている。このことから、今年度より特別支援教育コーディネーター認定研修をスタートさせていく。まずは各学校の特別支援教育の状況、自立活動の状況について把握し、指導助言を行ってまいりたいと考えている。

一次訪問終了後、概ね8月以降に実施する計画訪問2回目において授業改善の状況の変化について確認するとともに、研究協議においては、授業を行った先生の授業を通して、具体的な授業イメージが浮かぶような指導助言を行い、全教員が日常的に授業改善を進めていけるよう指導を行ってまいりたい。

この期間は、各学校の要請に応じて指導主事を派遣する期間でもあり、2回の計画訪問以外にも、各学校のニーズに応じて指導主事を派遣し、指導助言などを行い、教員の資質向上を図ってまいりたい。

併せて、昨年度から取り組んでいる指導主事による示範授業に加え、釧路市授業マイスターによる示範授業を実施し、学校課題、中学校区への波及性など、様々な観点から派遣する学校を選定し、1学期の段階から学校に派遣を行い、授業改善を進めてまいりたいと考えている。

また市教委では昨年度も示したように、全国学力・学習状況調査や釧路市標準学力検査等の調査結果から、課題となった学校に対して、教育指導参事や総括指導主事たちが複数回の学校教育指導を行い、学校全体の授業改善状況や学力向上の取組状況を確認するほか、具体的な指導助言を行ってまいりたい。

◎この説明について、各委員から次の通り発言あり

(山口委員)

先ほど普通学級の子どもは減少しているが、特別支援学級に通う子ども数は増えているという報告がされたが、説明の中にあつた特別支援教育の状況については、非常に重要な課題であると思うので、旧態依然とした特学経営を行っている学校については、指導をお願いしたい。各学校の特別支援教育が充実することを期待している。

(大山委員)

各種調査の結果から課題が見られる学校を選定し指導を行うと掲載されているが、学校によって大きく差があるので、指導が必要な学校には遠慮せず進めていただきたい。

もう1点、義務教育学校になる学校の状況がまだ十分ではないといった情報も入っているので、義務教育学校になる学校については特に重点をおいて参事や総括から指導助言にあたっていただきたいと思う。

(齊藤総括指導主事)

学校によつての差ということで、昨年度において、ある学校に対しては1年間に5回訪問しており、学力状況などをしっかりと確認しながら進めていった。参事も同様に重点をおいて対応しているので、継続的に進めてまいりたい。

(岡部教育長)

私も今月末か来月から、全校を回る予定である。

(大山委員)

私たち教育委員もスケジュールを合わせて、極力学校に伺いたいと考えているので、学校への説明もよろしくお願ひしたい。

#### 【公開案件】 報告事項

##### (5) 算数・数学に関するアンケートの結果について

(齊藤総括指導主事)

報告事項5、算数・数学に関するアンケートの結果について報告する。

本アンケートは、令和7年1月に、小学校3年生以上の全児童生徒と、これら児童生徒に算数・数学を指導している全教員を対象に実施したものであり、今回の調査で3回目の実施となる。調査回答者数は、児童生徒5,905名、教員275名となった。

3回目の実施となった本アンケートの目的としては、児童生徒に対する同一質問の結果を比較することで、成果と課題の整理を行うとともに、次年度に向けた授業改善の方向性のエビデンスとして活用することである。

今回は、1回目、2回目、3回目の比較において、特筆すべき傾向を中心に説明する。概要版資料「特筆すべき事項の比較結果」について、設問(5)「授業で学習したことは、ふだんの生活や学習にいかされていると思うか」において、現在の中学校1年生、2年生でどちらも、中学校1年生における学習指導を終えた後に、肯定的な回答をした生徒が減少している。加えて、設問(7)「4月からの数学の授業の内容はよく分かるか」という設問でも、現在の中学校1年生、2年生でどちらも、中学校1年生における学習指導を終えた後に、肯定的な回答をした生徒が減少している。「学ぶ意欲」、「授業内容の理解」という両面において、肯定的な回答割合が減少するといった実態が明らかとなり、このことは釧路市において、非常に大きな課題であると捉えている。子どもが今年度の授業を、どのように思っているのかについて自由記述の否定的な回答では、「難しい」「わからない」といったものが多く、その理由として、「授業の進度が速く理解が追いつかない」、「問題の難易度が高く解き方がわからない」等が挙げられた。

この結果を踏まえて、特に中学校1年生の授業改善に焦点化し、取組を進めてまいりたいと考えている。具体的には、昨年度と同様に釧路教育研究センターの学習指導・開発研究グループの取組で、小学校と中学校の学習内容のつながりを意識した授業改善の在り方について調査・研究を進めて、リーフレット等にまとめて発信していきたいと考えている。加えて、

指導主事や授業マイスターによる示範授業を通して、授業改善の具体的なイメージがもてるよう指導助言してまいりたい。

教職員へのアンケートでは、概要版資料にあるように、「学力差のある学級における授業づくりについて知りたい」「授業の導入場面の工夫について学びたい」「単元計画や学習指導案資料を共有してほしい」といった要望が多く寄せられた。これらの要望も反映させながら、来年度の取組を充実させていきたいと考えている。

該当学年を追跡調査し、変化を分析するアンケートを実施したことにより、児童生徒の学習状況や意識の変化、教職員の要望についてエビデンスを得ることができた。今後は、これらの課題解決に向けた実効性のある取組を着実に進めていくことが必要であり、先ほど示した改善策を実行してまいりたいと考えている。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(山口委員)

確認だが、最後に課題解決の方向性についてということで2点まとめられているが、これで全てではないということで良いか。

(齊藤総括指導主事)

そのとおりである。

(大山委員)

先日の校長会議の際、自校の課題について学力の二極化が進んでいるので、学力が低い子どもたちに対する対応をどうしていくかということ今年度の重要な課題として捉えている校長が非常に多かったように思う。資料にも掲載しているが、先生方の要望の中にも学力差が激しい中、授業をどうするかということで、学力が低い子どもたちに対する対応というのは今後の大きな課題になると思われることから、その点をしっかりと寄り添って指導助言していただきたいと思う。また授業の中で学んでいることが自分のこれからの生活にどのように生きるのかと疑問を感じている子どもたちが多いように思うが、去年指導主事の示範授業の中では、全ての子どもを取り残さないということで、理解できて良かったという達成感を授業の中で味合わせるということを非常に大切にしている授業が多かったように思う。こういった授業を先生方ができるようになれば、自然と積極的に学んでいこうという子どもたちが増えて、それが将来の自分の生活にも役立てられるような人間が育つのではないかと思うので、ぜひその辺もよろしくお願ひしたいと思う。

(齊藤総括指導主事)

全ての子どもたちがその授業に楽しく参加できるような課題設定をどうするかということが最も重要であり、その課題設定を踏まえた上で、参加できる関わり方や雰囲気づくりが重要になるかと思う。そういったことを行いながら、学力が低い子どもたちが学べて楽しかった、友達に教わって良かったと感じることが大事だと考えているので、その点を中核に据えて進めていきたい。

(山口委員)

個人的には学力が低い子どもたちに対してだけでなく、学力が高い子どもたちに対しても、適切な対応が求められると思う。難しいと思うが、ぜひそういった子どもたちにも光を当てるといった授業を実現してほしいと個人的には思っている。

(齊藤総括指導主事)

そのあたりは個別最適な学びだと思うので、努力してまいりたい。

(靱山委員)

児童生徒の否定的な意見で「難しい」「わからない」との回答があったと思うが、授業内でわからないことが解決できなかったときに、児童生徒はどうしているのか。例えば先生や友達に聞いているのか、別の時間に確認できる時間を設けているのか、現状がわかれば教えていただきたい。

(齊藤総括指導主事)

専門的な話になるが授業を行う際、例えば子どもたちの顔色を見ながら、あまり理解していないと思うときがあれば「隣の人と1回相談してみよう」ということを行いながら状況を確認し、それでもわからない場合には再度黒板で説明するなどの進め方が丁寧な授業だと思う。そういった経験や技術は必要になるので、そのあたりは示範授業の中で先生方に学んでほしい点である。この点を流してしまうと、結局わからないまま取り残され、できている子どもたちだけで議論しながら、授業が終わってしまう。わからない子はわからないままとなっているのが、特に小学校の中で見られてきた傾向であることから、このあたりは前回の標準学力検査の結果である二極化ということに合致するので、このあたりを丁寧にやっていくのが大事だと思う。

(靱山委員)

学校訪問を行った際に、わからないことを隠さずにしっかりとと言える雰囲気が多く見られたが、結果としては否定的な意見の件数が多いので課題であると思う。授業改善も重要だが、わからないと思った時に何か解決できる時間を作ってあげることができたらと思う。中学校の場合、特に担当の先生になってしまうので難しいと思うが、それが先輩であったり、友達であったり、解決できる場を広げることが必要かと感じた。

(本川教育指導参事)

わからないことはわからないと言える授業づくりを進めてきているが、時間がないということは否応なくある。それを解決する方法として、家庭学習のノートに担任や教科担任がコメントを記入し、やり取りをしながら子どもたちのわからないところを解消する取組や、ある中学校では、職員室に生徒は頻繁に入れないことから、職員室の外の廊下に机をたくさん置いて、わからないことを質問できるコーナーを設けていたり、放課後学習の中でわからないところを生徒同士で教え合うことを頻繁に行っている中学校があったりと様々な手法を用いて取り組んでいる学校が増えている。授業の中で解決できないものは必ずある。そういった不足部分を担保できる方法を、学校間で共有し合い、さらに進めていくよう、教育委員会でも啓発活動を行ってまいりたい。

(岡部教育長)

オンラインタブレットを使ったアンケートは、色々なことに使えると考えており、教育課題がいくつもある中、それを子どもたちはどう感じているのか、わからないことをどのように対処しているのかということ、先生に聞くよりも、実際に子どもたちへ簡単に聞けるのであれば、それも1つの課題解決に向けた取組として、タブレットを活用できればと改めて感じた。

#### 【公開案件】報告事項

##### (6) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について

(大島学校指導課長)

報告事例6、釧路市コミュニティ・スクールの導入について報告する。

令和7年度4月1日から、新たに小学校3校と中学校1校でコミュニティ・スクールが導入され、これにより市内全域の導入校数と導入率は、小学校が23校で88.4%、中学校が12校で80%となった。今後のコミュニティ・スクールの導入については未導入校のうち小学校3校においては、昨年度より令和8年度の導入に向けた推進委員会が継続されるとともに、今年度は新たに中学校3校で推進委員会の設置が予定されている。第3期の教育推進基本計画最終年度となる令和9年度には、全ての学校に導入される予定である。

調査研究期間内においては、「目指す子ども像」の設定と実現に向けて、地域住民や保護者、教職員等で構成されるコミュニティ・スクール推進委員会により、協議を重ね、学校運営に地域の声を生かし、特色ある学校づくりを進めていくことを目指している。

最後に、昨年度におけるコミュニティ・スクールの特徴的な取組事例を紹介する。昭和小学校では、6年生を対象として開催されたジョブカフェにおいて、委員の人脈を活用し、様々な業種の企業に参加してもらった。鳥取小学校では、例年、「鳥取神社コミスク授業」と銘打ち、鳥取神社祭のみこし行列に6年生児童が参加する際の見守りとして委員が関わっている。阿寒中学校では、阿寒町商工会に所属する委員を中心に、阿寒高校学校祭の出店ブースで阿寒中学校の生徒がお手伝いとして参加するための協力を行った。大楽毛中学校では、例年、避難訓練や防災教室を地域と合同で実施している。愛国小学校では、公立大生を委員として委嘱しており、PTAのバザーになるが「愛笑フェスティバル」において、公立大生ボランティアとしてブースを出店した。また、コミスク委員が漢字検定や算数検定への見守りボランティアとして参加している。

このような各学校のコミュニティ・スクールの取組については他の学校へも周知を図り、今後もコミュニティ・スクールの活動を推進してまいりたいと考えている。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(山口委員)

コミュニティ・スクールが令和9年度に全ての学校に導入されるということだが、今重要とされている小中ジョイントプロジェクトと連携した特徴的な取組があれば、他の学校にも大変参考になると思うので、今後そういった資料を提供していただきたい。

(大島学校指導課長)

先ほどの報告にあった通り、令和9年度には全ての学校に導入することが決まっており、小中連携がコミュニティ・スクールの課題だと思っているので、こういった取組事例の紹介や「釧路市がめざす学校のすがた基本計画」の中でも、コミュニティ・スクールの中学校区における連携が重要視されているので、しっかりと進めてまいりたい。

(岡部教育長)

今回、取組事例を資料に追記してもらったが、コミュニティ・スクールの数が問題ではなく、それぞれの学校がどういったことを行っているかを他のコミュニティ・スクールに対し発信することが重要である。それらをどのように発信していくかということを考えてほしい。

(小出委員)

私もコミュニティ・スクールの委員を担っているが、年に1～2回、委員を対象にした研修会があり、各校のコミュニティ・スクールの委員が集まり研修会をしている。その中でコミュニティ・スクールの委員の中でもコミュニティ・スクールへの理解が少ない方が多いという印象がある。そういった状況化で活動をしていく場合は、学校主導になってしまうことから、コミュニティ・スクールを導入するにあたって、教育委員会からどういった説明を学校やコミュニティ・スクールの委員へ行っているのか教えていただきたい。コミュニティ・スクールの委員が理解を深めるために、研修会でそれぞれの学校ではこういった取組をしているという事例を共有することや、取組に悩むことが多いことから、それに対する窓口を設けることが重要かと思う。

(本川教育指導参事)

現在はコミュニティ・スクールの調査研究を始める学校や、本格的に導入する学校に対し、コミュニティ・スクールの内容説明と同時に、地域学校協働本部事業やコーディネーター等の違いや、コミュニティ・スクールを導入した場合、どのように変わっていくのかの説明を行っている。小出委員も経験があるかと思われるが、以前までは研修会においてはワールドカフェ方式を取り入れ、それぞれの学校の実践例などを色々な学校において短時間で交流し合えるような研修交流会を行っていた。今後、どのような形で行えば良いか内部で検討したい。

(山口委員)

関連して要望であるが、コミュニティ・スクールが上手く機能している学校には、コーディネーターが配置されているように思われる。コーディネーターは自分の学校の活動を前に進めることが役割であるが、小中ジョイントプロジェクトという考え方で、横断的に活動できるような位置づけを今後考えていただければ、充実していくと感じるので、要望としてさせていただきます。

(本川教育指導参事)

コーディネーターを配置している学校と配置されていない学校があるが、配置している学校のコーディネーターを束ねて、横の連携をつなぐ役割を統括コーディネーターということで、教育委員会に森氏を配置している。統括コーディネーターから各学校のコーディネーターに情報発信をしているところであるが、今後は情報交流を、市全体で機能するように統括コーディネーターに相談したいと思う。

(小出委員)

地域コーディネーターがいる学校では、地域コーディネーター同士の横の繋がりを広げようとしているところであり、どうしても1つの学校だけでボランティアを賄うとなると難しさが出てくることから、お互いに協力し合うことができるよう努めているところである。地域コーディネーターが配置されていない学校であっても、連携してボランティアが派遣されるような取組になればと思っている。

(岡部教育長)

参事からの説明のとおり、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一緒に考えられているためそのような状況となっていた。学校支援ボランティアというのは、コミュニティ・スクールの取組ではないが、その理解が浸透していない。コミュニティ・スクールに関する説明者の理解が足りないのではないかと考えている。

#### 【公開案件】 報告事項

##### (7) 北陽高等学校への景文高級中学訪問団の来校について

(及川北陽高校事務長)

報告事例7、北陽高等学校への景文高級中学訪問団の来校について報告する。

台湾の景文高級中学の北陽高校訪問については、もともとは昨年、令和6年5月に計画されていたところ、台湾東部沖地震の発生により同校の訪日旅行自体が中止となり、これまで再調整を重ねてきたところだが、令和7年5月19日(月)から23日(金)まで4泊5日の日程で同校の訪日旅行が実施されることとなり、その中で5月20日に本校への訪問が実現する運びとなった。訪問団は、5月19日に新千歳空港に到着後、十勝川温泉にて宿泊し、翌20日の朝にホテルを出発して本校へと向かう予定で、本校到着後は、歓迎セレモニー、交流活動、昼食を行い、午後には、春採アイスアリーナでのスケート体験や、細岡展望台での散策を予定している。これらの活動には本校生徒が同行し、スケートの補助や湿原の紹介などを通じて、相互の交流を深める機会としたいと考えている。また、夜には釧路日台親善協会主催の歓迎会が予定されており、現在、その具体的な内容などについて調整が進められているところである。

訪問団は総勢32名で、その内訳は生徒28名、引率者は校長先生と担当教員の2名、参加生徒の家族が2名の予定である。なお、20日の夜は釧路市内に宿泊し、翌日からは富良野・美瑛方面、札幌方面へと旅行した後、23日に新千歳空港から台湾に帰る予定となっている。

北陽高校では、本校生徒が台湾見学旅行にて景文高級中学の皆様から大きな歓迎を受けたご厚意を胸に、今回の訪問を通じて、「北陽高校に来てよかった」「これからも長く交流を続けていきたい」と感じてもらえるよう準備を整え、誠意を持って同校訪問団を迎えたいと考えている。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(山口委員)

来られる方々が北海道、そして釧路市の魅力を十分感じて帰っていただきたいと思っている。スケート体験をするアリーナは、学校から近いから春採アイスアリーナなのか、それとも最も施設として充実している釧路アイスアリーナを使用できないため春採アイスアリーナなのか、理由を教えてほしい。

(竹内スポーツ課長)

この時期は春採アイスアリーナのみ営業しており、他のアリーナはメンテナンスの時期となっている。

#### 【公開案件】報告事項

- (8) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について
- (9) 令和7年度市立美術館事業について
- (10) 動物園の近況について

(内海生涯学習課長)

報告事項8、ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について報告する。

4月26日から5月6日までの各施設の開館状況においては、資料のとおりであるが、期間中、ウインドヒルくしろスーパーアリーナ(湿原の風アリーナ釧路)、動物園、丹頂鶴自然公園などでは、休まずに開館する。

ゴールデンウィーク期間中の主な行事として、釧路市立美術館では、コレクション展「風花(ふうか)雪(せつ)月(げつ)」を開催し、この期間中の4月26日(土)と27日(日)の2日間、子ども向けのイベント「ペキタ工作広場」を開催する。

あすなる会こども遊学館(釧路市こども遊学館)では4月29日から5月6日まで「ゴールデンウィークイベント2025木のおもちゃであそぼう!」を開催するほか、4月29日から5月5日までの期間、小中学生の展示室観覧料が無料となる。

中央図書館では、「春のお話し会」や「祝日上映会」、ウインドヒルくしろスーパーアリーナでは、4月29日および5月3日から6日まで未就学児が多目的室に設置された遊具等を利用して無料で遊べる「こどもアリーナ」を開催する。

博物館では、現在開催中の企画展「道東考古～縄文の世界～」の関連行事として、4月27日に「縄文人体験『数千年前の万能ツール! ? 黒曜石の石器づくり』」を、5月3日には「土

器の模様の写しどり&縄文粘土アクセづくり！」を開催する。また、体験や工作を通じて楽しく学べる「博物館で遊ぼう」を4日から5日までの2日間、開催する。なお、5日の子どものは、市内の小中学生の入館料が無料となる。

(曾根美術館長)

報告事項9、令和7年度市立美術館事業について報告する。

今年度は4月12日(土)から開催しているコレクション展「風花雪月」を皮切りに6本の展覧会を予定している。この中から、特別展3本について、日程などを紹介させていただく。パンフレットでは赤色の見出しとなっている展覧会となる。

1本目の「三輪晃久写真展 地球に生きる」は、釧路市にも滞在した三輪晃久の生誕100周年を記念し、世界各国の風土や民族の暮らしを写した作品を紹介するもので、5月24日(土)から6月29日(日)まで開催する。

特別展2本目の「海洋堂フィギュア展」は、精巧なフィギュアで高い評価を受ける海洋堂の企画展であり、等身大のキャラクターから手のひらサイズの恐竜まで3,000点以上を公開する内容となっており、7月12日(土)から8月31日(日)まで開催する。また、この期間中の8月1日(金)は、「ご招待の日」とし、釧路市立美術館アートギャラリー協力会が入館料を負担するので、多くの皆様のご来館をお待ちしている。

特別展3本目の「描く人、安彦良和」は、人気アニメーションのキャラクターデザイナーや漫画家としても活躍する安彦良和の企画展であり、9月13日(土)から11月3日(月)まで開催する。

以上の特別展のほかに美術館で開催する事業としては、「道展・釧路移動展」や「釧路郷土作家展」、阿寒・音別地区への巡回展などを予定している。

(平野ふれあい主幹)

報告事項10、動物園の近況について報告する。

老朽化に伴い改修工事を行っていた「ふたみ青果エゾヒグマ館」が、このたび完成の運びとなり、令和7年4月27日(日)午前11時より、リニューアルオープンセレモニーを開催する。式典は、同館前にて行い、テープカットなどを予定している。セレモニー終了後には、参加して下さった皆様に記念カードの配付を行うほか、当園職員によるエゾヒグマに関するガイドも実施する。現在、エゾヒグマは3月末に登別クマ牧場から導入した「クッタ」と「カイ」のオスの兄弟2頭を飼育しており、新しくなった展示施設とともに、動物福祉に配慮した飼育環境をご覧いただける内容となっている。

次に、「春の動物園まつり」は、令和7年4月29日(火曜日・祝日)から5月6日(火曜日・祝日)までのゴールデンウィーク期間中に実施する。期間中は、動物に関する理解を深めていただくことを目的とした飼育員による動物ガイドやヒツジの毛を使ったワークショップなど、日替わりで様々な企画を展開する予定である。

イベントスケジュールについては、資料のチラシを市内及び管内の小学校や幼稚園、保育園に配付しているほか、公式ホームページや園内掲示を通じてお知らせをしている。

最後に、当園で飼育しているアムールトラ「ココア」の最近の健康状態について報告する。

ココアは生まれつきの障がいを抱えながらも昨年5月に16歳を迎え、日々穏やかに過ごしていたが、年齢からくる衰えも徐々に見え始め、昨年から腰の湾曲が進み、後ろ足で立つことが難しくなり、寝ていることが多くなった。今年に入り、立ち上がることが困難な日が増え、同時に、便秘と食欲減退の症状が見られ、生活の質の低下が懸念される状況となったことから、皮膚の洗浄や飼育スペースへのマットの追加設置等を行い、ココアの生活環境の向上に努めてきた。1月下旬には、自力で屋外放飼場へ移動したり、排便も継続して確認されるなど、一時的な体力の回復が見られたが、後ろ足の起立はできず、引きずって移動するため擦り傷ができてしまう状況であった。その事情をご理解くださったマットメーカーの東洋紡エムシー株式会社様より、床ずれおよび擦り傷軽減を目的としたマットの提供を受け、ココアもこれに順応し、症状の改善に寄与した。しかしながら、3月下旬より再び食欲の低下および移動の減少が見られ、全体的な活力も低下してきた。このような体調の変化を踏まえ、4月8日より展示を中止し、現在は体調の安定と治療に専念している状況である。今後も、飼育員および獣医師の連携のもと、細心の注意を払いながらココアの健康管理に努めてまいりたい。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(山口委員)

ココアの年齢が16歳ということだが、アムールトラの平均寿命はどのぐらいか。

(平野ふれあい主幹)

15歳を超えたら、高齢といわれる部類となる。ココアの母親も19歳で亡くなっており、その当時では国内最高齢のトラであった。

(山口委員)

障がいを抱えながらここまで頑張ってくれているということか。

(平野ふれあい主幹)

所謂、健常のトラと変わらず、長生きをしてくれている。

(山口委員)

ヒグマが2頭来園されたが、今後釧路動物園内でのヒグマの繁殖の計画はあるのか。

(平野ふれあい主幹)

現時点では繁殖は考えていない。ヒグマの雄と雌は繁殖期しか一緒におらず、同じ場所に飼育するというのはとても困難な状況であり、飼育スペースの問題からも難しい状況である。

(山口委員)

登別には多くのヒグマがいるが、そこでも雄と雌は別々で過ごしながらも、繁殖というのは行われていないのか。

(平野ふれあい主幹)

別々に飼育しているが、繁殖期だけ一緒に過ごしている。

(小出委員)

ココアには早く元気になってほしいと思っている。チラシの1番下に50周年記念事業実行委員会のQRコードがあり、読んでみると50周年記念の動画や特設ホームページがつくられており、大変素敵な動画により、開園からの歴史をずっと追っていくようになっており、思い出に浸りながら拝見した。終盤には熊舎の紹介動画も載っており、大変素敵で熊舎に行ってみたいと思う内容であった。美術館についても、毎回素敵な企画展であり、今年度も楽しみにしている。